第三十四回

リレーエッセイ

白い通学時間

イラスト・岡林玲

高校生のとき、電車で一時間半ほどかけて通学していた。

東京調布市の自宅から、町田市にある私立校まで。バスを使って小田急線の駅まで出れば一本だったが、朝の通勤ラッシュを避けて大回りしていた。京王相模原線、小田急多摩線、小田急線の三本乗り継ぎ。

下りなので、はじめの二本は朝の通学時間でもがらがらだった。同じ車両に乗っている人たちの顔を全員覚えられるほどだった。その中のひとりに、現在の私くらい、つまり五十歳くらいの女性がいた。太っていて、眼鏡で、地味だがこだわりがありそうな服を着ていて、いつも本を読んでいた。私が最初に乗る電車に彼女はすでに乗っていて、たいてい駆け込み乗車の私を、じろりと見上げて、すぐに本に顔を戻した。教師、あるいは図書館司書か。いずれにしても、こわそうな人だと思っていた。

あるとき、駆け込みが間に合わなくて、しまりかけたドアに通学鞄だけをかろうじて挟んで、発車を遅らせてしまったことがあった。そのとき彼女が席を立ち、両手でドアをぐぐっと開いて（今考えれば、同じタイミングで車掌さんがドアを開けてくれたのかもしれないが）、私の体を車内に引っぱり込んでくれた。どうもありがとうございます。はじめて彼女と言葉を交わした。そのあとすぐに「無理なご乗車はおやめください」という車内放送が流れると、私を見てふふっと悪戯っぽく笑った彼女の顔を、奇妙に鮮やかに覚えている。

混雑しないかわりに、乗り継ぎに時間がかかった。当時、京王相模原線も小田急多摩線も、本数が少なかったので、短いときでも十五分くらい待たないと次の電車が来なかった。朝はさほどでもなかったが、下校時には連絡が悪いと三十分以上待つこともあった。そんなときにはホームのベンチに座ってノートを広げ、日記とも小説ともつかないものをちまちまと書いていた。アメリカンコミックの「スーパーマン」の絵柄を表紙にした大判のノートで、中身を読み返すのには多大な勇気が必要だけれど、今も捨てられずとってある。

校風が肌に合わなくて、学校がきらいだったから、毎朝、途中下車したくてたまらなかった。実際、降りてしまって、学校をさぼったことが何回かある。映画を観にいくとか、喫茶店に入るとかの勇気もない子供だったから、ただ見知らぬ町をあてもなく歩き、公園でお弁当を開いて時間を潰すだけの、情けないエスケープだった。

いつも空いていたこともあって、あの通学時間には、白っぽい靄のようなイメージがまといついている。自分がどこにいるのか、どこへ向かっているのかわからない、途方に暮れた靄の中。やっとやってきた電車に乗り込み窓の外に目をやると、電車が逆方向へ走り出すような錯覚がいつもあった。そんな時代を経て、私は今ここにいる。

撮影／三原久明

文・井上荒野
Areno INOUE

東京生まれ。1989年「わたしのヌレエフ」で第1回フェミナ賞を受賞し、デビュー。2004年『潤一』で第11回島清恋愛文学賞、08年『切羽へ』で第139回直木賞、11年『そこへ行くな』で第6回中央公論文芸賞を受賞。『あなたがうまれたひ』など絵本の翻訳も手掛けている。最新刊に『だれかの木琴』（幻冬舎）がある。